インタビュー

ユニロボット㈱
代表取締役
酒井 拓 氏

教育領域での取り組みを強化

開発支援の新事業も複数展開

ユニロボット㈱（東京都渋谷区笹塚3－2－15、☎03－6822－9222）は、次世代型ソーシャルロボット「uniboユニボ」（ユニボ）の開発・販売を手がけるスタートアップ企業。法人向けを中心に採用実績を積み上げ、直近はユニボの技術を活用した開発支援サービスも展開するなど事業の幅を広げている。今回、代表取締役の酒井拓氏に話を伺った。

教育コンテンツを搭載した「ユニボ先生」

――まずユニボについて教えて下さい。

酒井　利用者の趣味・嗜好・生活習慣を学習し、成長するという特徴を持つ据え置き型のコミュニケーションロボットで、会話機能をベースに、写真撮影、動画再生、ビデオ通話、家電の音声コントロール、スケジュール管理など、様々な機能を搭載している。日々の会話から利用者が求めている潜在的なニーズをユニボが感じ取り、その状況に適した言葉や情報を提供してくれるなど、そ

の人に合った会話や意思決定支援を行える。

――販売面の展開は。

酒井　法人向けの販売は2017年10月、家庭向けの販売は18年1月から行っている。そのうちでは、高齢者向けサービスの充実化を図っており、レクリエーション目的からボケ防止策や体調管理などが今後期待されている。

――サービスの幅を広げている法人向けの特徴は。

酒井　一番の特徴は、スキルクリエイターという開発キットを開放して法人向けでは、オフィスや小売りなどでの受付・販売員代行から始まり、新入社員・社内研修向けロボットとして会社概要や各種ガイダンスの説明代行、研究機関・大学での利用も増えている。また、作業効率化などを目的として、運送業界や建設現場での点呼や入退室管理から、ホテル業界でのフロント御用聞き、ヘルスケア業界おり、かなり深いところまでカスタマイズができることだ。動画再生やQRコード連携はもちろんのこと、言語切り替え、音声合成の話者変更をはじめ、他サービスとの連携や切り替えがとにかく柔軟に行える。また、社内システムとの連携を可能とするProxyサーバーの対応も取っており、すべてではないが、社内システムとの連携を可能にしていることも活用の幅を広げている。

――注力されていることは。

酒井　教育領域でユニボを活用する取り組みを強化している。その一環として、園児や小学生を対象とした学習塾向けのソリューション開発に力を入れている。近年、様々な業種で人手不足が問題となっているが、学習塾でも先生の不足が大きな問題となっている。そこで当社は学習教材の開発などを手がける㈲ソリューションゲート（東京都荒川区）と連携して、ユニボに教育コンテンツを搭載した「ユニボ先生」のサービスを20年春にリリースする予定だ。現在相当量のコンテンツの開発を進めており、算数、英会話、そろばんなどの学習をユニボ先生で支援することで、生徒の学習意欲が向上する実証実験の結果も得られており、20年度上期から本格的な導入が始まる見通しだ。

――新たな取り組みも進めておられますね。

酒井　新規事業としてオリジナルロボットやデバイスの開発を検討している方に向けて、ユニボの開発や生産で培った要素技術を提供し、開発を支援する「ロボット・ハードウエアインテグレーションサービス」を進めている。ユニボの技術を活用することで、短期間かつ低コストでスマートロボットやハードウエア開発の試作が行え、パーソナルAIを含めた日常会話エンジンやソフトウエア開発キットも活用することで、IoT機器や他サービスの制御が音声会話だけで容易に行える。

そのほか、音声インターフェースを活用したソリューションの開発、AI・IoT技術に関するコンサルティング事業、組み込みソフトウエアの受託開発サービス、IoT機器の試作製造・販売代理事業なども進めており、こういった取り組みや協業、資本業務提携にご興味のある方はぜひお声がけいただければと思う。

――今後の方針を。

酒井　先に述べたような取り組みを進めるにあたり、日本郵政キャピタル㈱（東京都千代田区）などを引受先とする第三者割当増資を11月に実施し、2億8000万円の出資を得た。その資金を活用して、人員ならびに開発体制を拡充していき、ユニボを含めた様々なロボット／IoTハードウエア関連の取り組みを進める。また、様々な企業との協業体制も構築していき、IPOも視野に入れながら事業を推進していきたい。

（聞き手・浮島哲志記者）